

モハマッド・ナリー出土仏説法図と『大阿弥陀経』

壬 生 泰 紀

0. はじめに ラホール博物館蔵のモハマッド・ナリー出土仏説法図（所蔵番号 G155, 3-4 世紀）は、高さ 119 cm, 幅 97 cm という大構図の複合型浮彫である（cf. Harrison and Luczanits 2012: 197-199, figs. 1-4）。ガンダーラ仏教美術の中でも有名な作品の一つであり、古くより研究者から関心がよせられている。近年の当該浮彫のモチーフに関する研究史の整理によれば、①「舎衛城の神変」説（e.g., Foucher 1909）、②「大乘的仏陀の神変」説（e.g., Rosenfield 1967: 235-238; Rhi 1991, 2011; 宮治 2010: 147-152）、③「阿弥陀仏国土」説（e.g., Huntington 1980; 荒牧 2008; 能仁 2011; Harrison and Luczanits 2012）、④「阿闍仏国土」説（Schopen 2005: 273-274, n. 50）の 4 つに大別できる（cf. 宮治 2010: 120-158; Harrison and Luczanits 2012: 71-73）。これらのうち、現在では②と③の両説が有力視されており、いまもなおその是非をめぐって議論されている。

「大乘的仏陀の神変」説とは、種々の大乘経典（〈法華経〉¹⁾、〈如来蔵経〉、〈華嚴経〉、etc.）に見られる大乘仏教的な仏陀（釈尊とする見方が多い）による神変に当該浮彫のモチーフを求めた説である。一方、「阿弥陀仏国土」説とは、当該浮彫のモチーフが浄土三部経、特に〈無量寿経〉の最古訳『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道経』（T. 12, no. 362; 以下『大阿弥陀経』と称す）に見られる阿弥陀仏とその国土の描写であると解釈する説である。もしも当該浮彫が阿弥陀仏国土をモチーフにした作品であれば、ガンダーラ仏教美術における稀少な阿弥陀信仰をあらわした作例となるため、このモチーフの解明は重要な課題である。

さて、両説ともに重大な問題を有している。それはモチーフと合致しない図像表現がいずれの説を採っても確認されることである。この問題が当該浮彫のモチーフを同定する際、大きく立ちはだかるのである。結論を先に提示しておくとして、『大阿弥陀経』の終盤（316b23-317a4）に見られるような「阿弥陀仏国土の顕現」の場面が当該浮彫のモチーフであると筆者は考えている。このように解釈した場合、

(160) モハマッド・ナリー出土仏説法図と『大阿彌陀經』(壬 生)

浮彫中にこの場面と合致しない図像表現が含まれていたとしても問題とならないのである。すでにこの場面と当該浮彫との関係性については論じられているが、上記の視点からの論考はなされていない (e.g., 荒牧 2008: 144-151; 能仁 2011: 213-215)。そこで、本稿では、『大阿彌陀經』を手掛かりに、まず「阿彌陀仏国土の顕現」の記述を確認し、そこには見られない図像表現が取り込まれた背景について論考する。加えて、この場面が図像化へと向かう可能性についても検討する。以上の考察により、モハマッド・ナリー出土仏説法図が主として「阿彌陀仏国土の顕現」の場面をあらわした作品であることを論証したい²⁾。

1. 『大阿彌陀經』所説の「阿彌陀仏国土の顕現」 まず「阿彌陀仏国土の顕現」の冒頭 (316b23-c3) を以下に引用する。

佛告阿難。「我哀若曹。令悉見阿彌陀佛及諸菩薩・阿羅漢所居國土。若欲見之不？」

阿難即大歡喜長跪叉手言。「願皆欲見之！」

佛言。「若起更被袈裟，西向拜，當日所沒處，爲阿彌陀佛作禮，以頭腦著地言。『南無阿彌陀三耶三佛檀。』」

阿難言。「諾！ 受教。」

即起更被袈裟，西向拜，當日所沒處，爲彌陀佛作禮，以頭腦著地言。『南無阿彌陀三耶三佛檀。』阿難未起，阿彌陀佛便大放光明威神，則遍八方上下諸無央數佛國。

ここではまず、阿彌陀仏国土を見たいという阿難たちの願いに応える形で、釈尊はかれらに西に向かって礼拝・称名することを勧める。すると次の瞬間、阿彌陀仏が娑婆世界に向けて光明を放ち、阿難たちはそれを目の当たりにするのである。

さて、当該浮彫の上から2段目の右端に、岩座に坐した釈尊が比丘に何かを説示している場面（「説示する釈尊」）がある。この図像表現は、先の場面の冒頭における阿彌陀仏国土を見せようとする釈尊と、指示通りに礼拝する阿難とに同定できる。そして、その釈尊が指し示す先には、転法輪印を結んだ主尊が大蓮華座に坐している（「大蓮華座に坐す主尊」）。この主尊は図像学的には仏の放光をあらわしているとの指摘がある（宮治 2010: 438-443）。したがって、光明を主たる徳性とする阿彌陀仏が自身の国土中あるいは娑婆世界に光明を放つ様子がこの主尊に投影されているとも解釈できる。つまり、この主尊は先の場面で阿難たちが目の当たりにした阿彌陀仏であると十分に考えられる³⁾。一方で、以上の両図像の関係性を勘案すれば、「大乘的仏陀の神変」説に多く見られる主尊を釈尊とする見解には難があるといえる。

では再び本經典所説の「阿彌陀仏国土の顕現」の場面に戻り、最後の記述に注目したい。そこには以下の釈尊と阿難との問答 (316c28-317a4) が存在する。

佛告阿難阿逸菩薩等。「我說阿彌陀佛及諸菩薩阿羅漢國土自然七寶。儻無有異乎？」
 阿難長跪叉手言。「佛說阿彌陀佛國土快善。如佛所言，無有一異。」
 佛言。「我說阿彌陀佛功德國土快善，晝夜盡一劫，尚復未竟。我但爲若曹小說之爾。」

阿難たちが釈尊の奨励と阿彌陀仏の光明によって目の当たりにした阿彌陀仏の特質や国土のすばらしさと、これまで釈尊が説いてきたそれらの様相とが一致していたことが、この問答よりうかがえる。つまり、ここで阿難たちは釈尊が説いてきた阿彌陀仏に関する教説そのままを自身の目で確認するのである。換言すれば、本經典全体に説かれる阿彌陀仏に関する教説はすべて、この場面に集約されることになる。このことは当該浮彫を解釈する上で重要となる。当該浮彫がこの場面を全体のモチーフとした場合、その中にあらわされた諸図像は、『大阿彌陀經』(さらには〈無量壽經〉諸異本)に確認されるものであれ、されないものであれ、それらすべてが阿彌陀仏国土をあらわす構成要素として許容されるのである。つまり、「阿彌陀仏国土の顕現」というモチーフは、〈無量壽經〉には見られない図像表現を取り込むことを、延いては、そうして制作された複合型の浮彫を阿彌陀仏国土の全容と見なすことをも可能にしてしまうのである。その最大の要因は、この場面が釈尊による保証のもとで阿彌陀仏国土の全容であると理解可能となったことで生じた解釈の融通性に求めることができる。

以上、「阿彌陀仏国土の顕現」の描写や意義に鑑みれば、この場面がモハマッド・ナリー出土仏説法図のモチーフであると解釈することができる⁴⁾。

2. 「阿彌陀仏国土の顕現」の図像化の背景 『大阿彌陀經』の末尾に教説の受持に関する記述が確認される。そこに先の場面との関連がうかがえる文言がある。それは「我般泥洹去後，汝曹及後世人，無得復言。『我不信有阿彌陀佛國』。我故令若曹悉見阿彌陀佛國土」(317c3-5)という文言である。ここで阿難たち大衆や後世の者たちが阿彌陀仏に関する教説に対して疑念を懐かないように、阿彌陀仏国土を余すことなく見せたことが釈尊自身より明言される。そのあとに、正しい教え(阿彌陀仏に関する教説)の受持が勧められる。このことから「阿彌陀仏国土の顕現」は、かの仏に対する疑念を防ぐだけでなく、その教説が後世へと正しく受持されていくためにも重要な役割を担う説示といえる。つまり、阿彌陀仏に関する教説を視覚的に示すことで、それに対する大衆や後世の者たちの疑念を防ぎ、かつ受持させる、という組織的な説示がここに確認できるのである。

このような視覚的側面は『大阿彌陀經』に遅れて翻訳(あるいは改訳)された『無量清淨平等覺經』(T. 12, no. 361)にも同じく確認される。しかし、『無量壽經』

(162) モハマッド・ナリー出土仏説法図と『大阿弥陀經』(壬 生)

(T. 12, no. 360) 以降成立の〈無量壽經〉諸異本においてはそれが変容する。まず、「阿弥陀仏国土の顕現」の場面は改編され、かつ阿弥陀仏国土を顕現させた意図を述べる文言はなくなる (cf. 香川本: 342-347, 364-365)。また、阿弥陀仏国土が顕現する上で重要となる阿弥陀仏の徳性である光明に関する記述も簡素化されてしまう (cf. 香川本: 114-115, 172-177)。その一方で、阿弥陀仏の名号に関する記述が増広する。たとえば、24 から 48 へと増設された法蔵菩薩の誓願の約半数が阿弥陀仏の名号を聞くことに言及しているのである (cf. 香川本: 136-141, 144-151)。

以上のように、〈無量壽經〉の初期に配される『大阿弥陀經』では説示方法として「阿弥陀仏国土の顕現」という視覚的側面をもつ方法が用いられていたが、後代の〈無量壽經〉の担い手は視覚的なものではなく聴覚的な説示方法を採用していくようになる。すわなち、〈無量壽經〉の展開において、説示方法が視覚的なものから聴覚的なものへと変容していくのである。これはおそらく、文書あるいは口頭で伝承される経典の性質上内在する、教説の視覚化の限界ということが大きく関わっていると思われる。そのような背景のもと、〈無量壽經〉が後代に聴覚的な説示方法を採っていく一方で、その初期に見られた視覚的側面は教説の説示を経典から図像に表現の場を移し、結果として、その最たるものであった「阿弥陀仏国土の顕現」の場面が図像化されるにいたった、と推測される。

3. おわりに 本稿において、『大阿弥陀經』の記述を手掛かりにして、モハマッド・ナリー出土仏説法図を「阿弥陀仏国土の顕現」の場面があらわされた作品と解釈する妥当性について検討を加えた。その結果、以下のことが指摘できる。① 当該浮彫中の「説示する釈尊」と「大蓮華座に坐す主尊」は、「阿弥陀仏国土の顕現」の場面に見られる釈尊と阿弥陀仏の関係性とよく一致する。② 阿弥陀仏に関する教説が集約された「阿弥陀仏国土の顕現」の場面を浮彫のモチーフとした場合、経典中に確認されない図像表現も阿弥陀仏国土をあらわす構成要素として許容される。③ 〈無量壽經〉の初期では「阿弥陀仏国土の顕現」に見られるような視覚的な説示方法を採用している。一方で、『無量壽經』以降成立の〈無量壽經〉諸異本では聴覚的な説示方法を主としている。

以上の3点より、当該浮彫を「阿弥陀仏国土の顕現」の場面が表現された作品と見なすことができる。その背景として、〈無量壽經〉の展開において、その初期に見られる視覚的側面によって教説の図像化が推し進められ、それに適した「阿弥陀仏国土の顕現」の場面が浮彫のモチーフとして採用されたことが考えられる。そのようにして制作された当該の複合型浮彫は、当時の人々に、阿弥陀仏国土の

全容があらわされたものとして受け止められていた、と推察される⁵⁾。

1) 本稿では、〈 〉で括った経典名は梵本、蔵訳、諸漢訳のもとになった種々の原本を総称する経典名として用いる。 2) 『大阿弥陀経』を比定に用いる妥当性については、同時代の阿弥陀三尊と思われる像（リングリング博物館蔵）に関して論じた際に述べたことと重複するので、そちらを参照されたい（拙稿 2014: 375-374, n. 8）。 3) 『大阿弥陀経』には、阿弥陀仏が大蓮華座に坐す様子（305c3-5）や説法する様子（e.g., 301a16-20, 307a21-25, 307b22-29）が描写されている。 4) 他仏国土の顕現が描かれる経典は他にも確認される（e.g., 〈法華経〉, 〈阿閼仏国経〉, 小品系〈般若経〉）。しかし、それらの記述は、「説示する釈尊」と「大蓮華座に坐す主尊」の両図像の関係性と必ずしも同定できるわけではないため、当該浮彫のモチーフと解釈するには問題がある。 5) 当該浮彫と類似するガンダーラ出土の複合型浮彫がいくつか存在する。たとえば、チャンディガル州立博物館蔵（所蔵番号 572）やベシャーワル博物館蔵（所蔵番号 2785）の浮彫などである（cf. Harrison and Luczanits 2012: 89-91, 201-202, figs. 7-8）。

〈参考文献一覧〉

〈一次文献〉

香川孝雄編『無量寿経の諸本対照研究』永田文昌堂、1984（＝香川本）。

〈二次文献〉

Foucher, Alfred. 1909. “Le ‘Grand Miracle’ du Buddha à Çrāvastī.” *Journal Asiatique*, 5-78.
Harrison, Paul, and Christian Luczanits. 2012. “New Light on (and from) the Muhammad Nari Stele.”『浄土教に関する特別国際シンポジウム』龍谷大学アジア仏教文化研究センター, 69-127, 197-207. **Huntington, John C. 1980.** “A Gandhāran Image of Amitāyus’ Sukhāvātī.” *Annali dell’Istituto Orientale di Napoli* 40: 651-672. **Rhi, Juhyung. 1991.** “Gandhāran Images of the ‘Śrāvastī Miracle’: An Iconographic Reassessment.” PhD diss., University of California.
Rhi, Juhyung. 2011. “Complex Steles: Great Miracle, Paradise, or Theophany?” In *The Buddhist Heritage of Pakistan: Art of Gandhara*, ed. P. Adriana et al., 65-72. New York: Asia Society Museum. **Rosenfield, John M. 1967.** *The Dynastic Arts of the Kushans*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press. **Schopen, Gregory. 2005.** *Figments and Fragments of Mahāyāna Buddhism in India: More Collected Papers*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
 荒牧典俊 2008『ブツダのことばから浄土真宗へ』（京都光華女子大学真宗文化研究所編）光華選書 5, 自照社出版。能仁正顕 2011「阿弥陀仏像の源流を求めて——ガンダーラの三尊像——」能仁正顕編『西域——流沙に響く仏教の調べ——』龍谷大学仏教学叢書 2, 自照社出版, 199-223. 壬生泰紀 2014「ガンダーラ仏三尊像にみられる尊名——『大阿弥陀経』所説の阿弥陀仏との関連について——」『印仏研』63 (1): 378-374. 宮治昭 2010『インド仏教美術史論』中央公論美術出版。

〈キーワード〉 ガンダーラ, 浮彫, 『大阿弥陀経』, 無量寿経, 仏国土の顕現, 神変
 （龍谷大学非常勤講師）